

---

# 梅園さん家のたまきとまどか

サユ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

梅園さん家のたまきとまどか

### 【Nコード】

N8627Z

### 【作者名】

サユ

### 【あらすじ】

梅園さんの家の姉妹は今日も元気です。元気担当物知りお姉さん・<sup>たまき</sup>環と、おっとりした料理が趣味の妹・<sup>まどか</sup>円、二人は美人姉妹と近所で評判です。昔から円はお姉ちゃんが大好きです。環も妹が大好きです。でも、二人の気持ちはちょっとだけ違うようです。姉妹は私立菖蒲ヶ丘女子高等学校に入学します。そこで出会った友人と一緒に過ごす日常は毎日が遠足以上。毎日がどきどき、わくわく、ふわふわでいっぱい。みんなと一緒に、ゆるやかな坂を一踏みずつ歩いて行くように、今日も姉妹は成長中です。 四コマ風。 42文字

×36行の見開き（よくオーバーしますが二枚分におさめてます）  
ことにお話が進んでゆきます。 ふわふわしながら連載開始です。

キャラクター紹介や、学校紹介など、設定も随時更新してみます！

評価・感想・ご意見ご要望あればたくさんください！

## 梅園さん家のたまきとまどか

私の名前は梅園まどか。

お姉ちゃんの妹をやっています。

私の朝は早い。

お姉ちゃんよりも、ずっと早くに起床する。

パジャマ姿から制服に着替え、エプロンをひっかけて、私はキッチンに立った。

「今日は雲一つない快晴だ」

小窓から澄んだ空が覗いている。

「んー、二度寝したら気持ちいいだろうなあ」

そんなことを呟いてはみたものの、ダメダメ、やることいっぱいなのです。

私はお姉ちゃんのためにお弁当を作らなければいけないのです。

ついでに、あくまでついでなんだけど、自分のもね。

日付は四月一日。

今日は高校の入学式。

私が得意とするお弁当作りで張り切らないわけがない。

こんな気持ちのいい日は公園でお弁当を広げると、美味しいんだよなあ。

「……入学式も大きな公園でやればいいのに」

そしたら、青空の下で私の作ったお弁当を頬張るお姉ちゃんを眺められるのに。

んー……、お姉ちゃんはもう高校生なのだし、ちょっとできそうにないか。

そういえば、高校って遠足あるの？

「……あ、みつけた」

私は食器棚の奥に重箱をみつけた。

それをひっぱりだして、にやけてみる。

お姉ちゃんの好物は、アスパラベーコン炒め。  
ベーコンはちょっとだけ焦がしたものがいいんだって。  
噛みしめるとじゅわっと味がしみ出るらしいよ。

私は、だから、火力強めで一気に炒めることにした。お姉ちゃん  
の好みの通りに。

私はお姉ちゃんの事でわからないことはないよ。お姉ちゃんの方  
が物知りなだけだね。

「ん、いい匂い。お姉ちゃん、喜んでくれるかなあ」

よし、高校生活を始めるにふさわしいお弁当を作るぞー。  
でも、高校ってどういうところなんだろう。

バナナはおやつに含まれちゃう校則とか、あるのかな。

お姉ちゃんは知っているかなあ。

あとで聞いてみよう。

チクタクチクタク。時計の音がちよっぴり大きい。

午前六時のキッチンにはちよっぴり寂しい。

お姉ちゃん、早く起きてこないかな。

## 梅園さん家のたまきとまどか2

お姉ちゃんの名前は梅園たまき。

私と合わせて円環になります。ほんと、円環姉妹とか、小学生の頃は言われてたなあ。

私とお姉ちゃんはまあいい輪で繋がっている。だから、私はこの名前、好き。

お姉ちゃんも、同じ気持ちだといいな。

午前七時。

私は二階に上がって、お姉ちゃんの部屋の扉をノックした。そろそろ起こさないと、遅刻してしまう。部屋を覗くと、お姉ちゃんはまだ寝ているみたいで。

「おねーちゃん」

私はそつとベッドに声をかける。

「……………」でも、返事はなかった。

私はエプロンで手を拭いて、がばつと布団をはいでみる。

……あれ？ あれあれ？ 巨大てるてる坊主が現れたよ。大きさは私と同じくらい。

「……………」コレは何？

世の中、不思議なことばかりだよな。お姉ちゃんならわかるかな。

「まどか、それは今日この記念すべき入学式という日を快晴にするための、かりんとうの袋に入っていた乾燥剤をふんだんに詰めた、たまき特性てるてる抱き枕だ！ どうだこの快晴っぷり！ うりゃあ！ おはようまどか！ うりゃりゃりゃりゃっ！」

「ぎゃーーーーー！ ぎゃーーーーー！ ぎゃーーーーー！」

背後からお姉ちゃんがエンカウントしてきたよ！ どこから現れたの！？

朝からもみくちゃんにされてるよ……！ ああ、でも、お姉ちゃん

は私の好きなところを知っているから、なんだか手足が痺れてきた。  
「おねえちゃ……ん……」体に力が入らないや。

頭を撫でられるのは、気持ちが良いよね。

「これが忍法変わり身の術だ。まだまだ隙だらけだな。はっはっは」  
「忍法使われたら、勝てないよお」

振り返ると、姿見で映し出されたような私の分身が高校の制服を着ている。

くりくりした大きな瞳に、さらさらの髪の毛。やっぱりいつでもお姉ちゃんはかわいいなあ。

そうそう、姉妹と言っても、私たちは双子なんだよね。違うのはほくろの位置だけだよ。

私は唇の右下に。お姉ちゃんは唇の左下に。だから鏡合わせ。鏡映文字のようだってお姉ちゃんは言っていたよ。

「あれ、まどか、なんで中学の制服着てるんだ？」

「おろ？」ということでしょう？

「さては寝ぼけてるな。昨日『同じ高校に行けるんだよね！？』本当にお姉ちゃんと一緒に！？」とか興奮しすぎて寝れなかったか？」

あ、そっか。私も今日が高校の入学式だったんだ。でも、寝ぼけてないよ！

んゝ、でもどうして間違っただろう？

頭をくしゃくしゃされて、少しだけ恥ずかしい気持ちになった。

「お姉ちゃん、高校ってどんなところかな？ 遠足にバナナ持って行ってもいいのかな？」

「まどか、高校はな、遠足よりも楽しいことがいっぱい待っているぞ！ バナナだけでなく、かりんとうだって持って行ってもいいんだ！ だから毎日が遠足だ。いや、毎日が遠足以上だ！ 覚悟しなけっ」

ビシイっとお姉ちゃんは決めポーズ。

なんだか、私、ワクワクしてきた。そっかあ、私も高校生になったんだよね！

## 入学式とお弁当と空き教室

校舎前の掲示板で私は驚いていた。

まさか、こんなことが起こるなんて、夢にも思っていなかったから。お姉ちゃんは言った。

そのまさかだよ。

「……しかし、話題作りの一環なんだろうな。家が同じなら情報の発信源を一つにまとめることができるし何より色々と教師側の手間が省ける。二人で一つ扱いか……、図られたな」

そう、私とお姉ちゃんは同じクラスになれるようです。

ほら、ちゃんと見て。指さして。はいチーズ。パシャ。

というわけで、私は浮かれています。写メ撮っちゃった。

お弁当を抱えながらだったから苦労したよ。でも、お姉ちゃんの大事なお弁当だから一緒に写りました。あ、まだ中身は秘密なんだからので、お姉ちゃんがどうして怪訝な顔をしているのか、わからない。

「もしかして、イヤ？」

「そんなわけないじゃないか。ウチは姉として、まどかから目を離さなくて済むから一安心だ」

うつんと、つまりそれは、『お姉ちゃんはまどかから一瞬たりとも目を離したくない目を離したら死ぬ。いやむしろ死ぬ』って事だよ。嬉しいけど、まだ朝だし、玄関先だよ？ 気が早いなあお姉ちゃんは。

校舎に入ると、初めて嗅ぐ匂いがした。これが 高校。

ていうか、女子校！ 右も左も女の子だらけ！ 桃源郷っていう

か、百合源郷？

すんばらしい。

だめだめ、私にはお姉ちゃんがいるのです。浮気、ダメ、絶対。

「にしても校舎に入る前にこの学校の体質に一石投じたくなっただぜ」



「なんで？」

新品の靴をきゅつきゅ言わせながら、一年生の階を目指す。……  
といっても半歩先に行くお姉ちゃんの後について行ってるだけ。さ  
つき、何年何組が見忘れちゃった。あ、一年なのは間違いないよね  
「めんどくさがりが多そうだからだ。双子を一括りにするとか、怠  
惰だろ」

「そうかなあ。私は嬉しいよ」

むつかしい言葉を使われたので、率直に感想だけ。

お姉ちゃんは、やっぱり物知りだ。

「ウチも嬉しいぞ。だがな、きつと面倒なことになる。そもそも、  
それも予定調和か」

ガラガラと教室の扉をお姉ちゃんは開ける。

あ、そういえばここ何組なんだろ？ つまり私は何組？

私は上を向きプレートを確認する。四組だそうです。

と、教室がどよめいた。私は上を見たままよろめいた。お姉ちゃ  
んにぐいつと引き戻される。

「……双子だ！」 明るい声。教室には半分くらい生徒が集まってい  
た。みんなの視線がこっちに集中している。そっか、珍しいんだっ  
け。

「……ああ、めんどくせえ。コレだよコレ」 お姉ちゃんが私を置  
いて先に教室に這入る。

「待って待って！」

私も慌ててその後ろに付いていく。

なんかお姉ちゃん、機嫌悪いなあ。なんとなくわかるんだよね。  
確かに私も、お姉ちゃんの事を興味津々に見るクラスメイトが、  
お姉ちゃんに恋をしてしまわないか、本気で心配です。

お姉ちゃんのかわいさは、珍しいからね！

どうしよう、お姉ちゃんを巡るライバルが、いきなり増えちゃっ  
たかもしれません。

ライバル……多すぎるよ……。

## 入学式とお弁当と空き教室2

校歌斉唱は歌えませんでした。

作詞者の名字が特に難しかったよ。龍ヶ嶺そ、そー……、なんて読むの？

そんな風にプリントとにらめっこしてたら、みんな座っててびっくりしたよ。

いつ終わったの？ お姉ちゃんも教えてくれればいいのに。って、今は私の前に座っているんだった。……首だけくるりとこつち向かないかな。

ところで、他のクラスの子かな？ 歌ってただけど、いつ練習したの？

不思議だなあ。

にしても入学式は眠たいなあ。

校長先生の話が長いよ。眠いよ。睡眠導入剤ってやつだよ。ほら、不眠症になったアイドルがよく飲むやつ。え？ そんなのない？

お姉ちゃんに聞きたいけど、聞けないしなあ。

それより。

びっくりしたことがあったよ。

誰かに聞いて欲しいよ。

でもお姉ちゃんに話しかけたら、先生方に印象悪いよね。

お姉ちゃんの印象が悪くなっちゃうことはしてはいけない。我慢

……でもっ、

「あ、あの。どうして校長先生、男、なんでしょうか、ね？」

訊いちちゃった！ 隣の子に訊いちちゃった。

悪いことしている私、現在かつこいいかもしれません。

ドキドキして、隣を向くことができないから、ちゃんと聞こえてるかな？

不安だけど、どうしよう、横向けないよ。

「ぶっ」

あれ？　なんか吹き出されちゃった。

と思つたら、くすくすと周りが笑い始めちゃったよ。

あれ？　お姉ちゃんまで肩が震えてる……！

「ねえ、本気で言つてんのアンタ。何ソレ、もう笑わせないでよ」

隣の子に小声で返されて、ついでに脇腹を突かれた。その子はまた「くくっ」と笑い始めた。

私はぎりぎりロボットみたいに首を曲げて「どうして？」と小声で返す。

「うちの担任も男でしょうが。女子校でも男の先生くらいいるわよ」  
そういえば、初老のおじいちゃん先生でした。

「ハートキャッチ、ばっちりね」

ウインクされちゃった。映画以外で初めて見たよ。

その子は大人っぽい人でした。切れ長の目で、なんだか諭されているみたい。

ほわわつとウェーブのかかった髪の毛は、毎朝コテでセットしているのかな？

「そ、そうなんだ。物知りだね」

お姉ちゃんとどっちが物知りかな？

「アンタ、それ狙ってるの？　……いえ、ごめんなさい。そういう感じはなさそうね」

「どういう感じ？」

「どうもこうもないわよ。……アタシの名前は鶴来<sup>つるぎやい</sup>冴子。よろしくね」

鶴来さんは、目であなたの名前は？　と訊いてくる。でもどうしてわかつたんだろう？

「あ、ええつと、前に座っているのがお姉ちゃんのたまきです」

「じゃなくてあなたの名前」

「はうん」まだ紹介途中なのに。いつもそうなんだけど、私はお姉ちゃんを紹介してからじゃないと、自分の事を話せないんだよ。

私は息継ぎをして。

「まどかです」

「双子なのね。でも同じクラスになるなんて、そんなこともあるのね」

お姉ちゃんと同じ事を言うんだ。そんなに珍しいのかな？

「……無礼かもしれないけど、あなたたち見分け方とあるの？」

「あ、よく聞かれますから、大丈夫ですよ。私たちは簡単です。美人な方がお姉ちゃん」

相違ない。お姉ちゃんは誰よりも美人でかっこいいんだから。

「……あの、アタシには……、ごめんなさい、似すぎててわからないわ」

「双子素人だからですよ、きっと」

お姉ちゃんの魅力に気がつかないなんて。お姉ちゃんを早く紹介したいなあ。

「あなた、まどかちゃんだっけ。面白いのね、とても」

ん？ そんな面白いこと言ったかな？ そういえばさっきも笑われちゃったっけ。

今も笑いをこらえているような……。私、へんかな？

「なんだか、いい友達になれそうな気がするわ。今年一年間、よろしくね」

「う、うん」

胸がほわっとなった。「うん」って言ったけど、胸の中では「うつそー」くらい思ってる。

綺麗な笑顔……。でも、ダメダメ！ これは違うよお姉ちゃん。

どうしよう、お姉ちゃん。いきなり友達できちゃったよ。

名前は、鶴来冴子さん。

ああ、早くお姉ちゃんに伝えたい！

これが高校……。すごいところだね！

でも、安心してお姉ちゃん。浮気はしないから。

だから、あとで一緒にお弁当食べようね。

しばらく私は目をつむることにしました。ね、寝てないよ！

### 入学式とお弁当と空き教室3

「というわけで、お友達……できちゃったみたいなの」

お昼休み。教室に戻ってきたよ。やっとお姉ちゃんに、報告だよ。何事も、組織ではホウレンソウが大切とお姉ちゃんは言ってたし。姉妹は……んー……組織っていうのかな。

「その言い方、なんか使うシチュ間違ってないか？」

お姉ちゃんが椅子の背もたれに肘をのせて、威厳たつぷりに座っている。

「えー。そうかなあ」

「『できちゃったみたいなの』……って、新妻か！ 妻夫木か！」  
どうして突っ込まれたのだろう？ でも、『できちゃったみたいなの』と私の真似をするお姉ちゃんかわいいなあ。

腰のラインが、いいんだよね。わかるかな。

「ところで、お姉ちゃん。そのお腹をさする手は何？」

「三ヶ月つてところかな」

鈍い私でもわかつちやつたよ、そのジェスチャー……。私との子？  
「でも、できちゃったんだよ？ お姉ちゃん」友達がね、いきなりだよ？

「まあ、お姉ちゃんという存在は妹よりも先にできるのかもしれないが」

まだ言うの！？

「最近の動向だと、『できちゃって』から、婚姻届を取りに行く男女が多いらしいわよ」

鶴来さん、大人っぽい発言で広げないで！？

恥ずかしいよー。

私の机の横に椅子を持ってきて座っていた鶴来さんが小さなあごに指を当てる。

鶴来さん、お姉ちゃんとも仲良くなってくれそうだよ。

大人っぽくて、美人で、お姉ちゃんとはちよつと違うけど、しっかりものさんのイメージかな。背は 私たちよりも、少し高くて、スラッとしてるんだ。ウェーブのかかった腰くらいまである髪の毛に、きりりとした切れ長の瞳。怖い人なのかなとも思ったけど、そうじゃなかったみたい。

「『できちゃったの』という台詞のありがたみが半減っつーか全壊だよな、そうなっちまったら」

「クリスマス前にプレゼントの隠し場所を当ててしまった時の残念感よりもひどいものね」

「だよなー。地上で爆発しちゃった三尺玉くらいかもしれないぞ」「ふふふっ」「はははっ」

え、二人だけで笑わないでよお。どこで笑えばよかったの？

なんだかこの二人、仲良くなりそうです。

どうしよう、このまま鶴来さんがお姉ちゃんのことを好きになっちゃったら。

「まどかもそう思うか？」

「え、ええと……、うん、そう思うよ」

なんとか私も話題についていかなきゃ。大人の階段だつてのぼつてみせます。

にしても、どうしよう。んー。

あ！ そうだ。

「お、お昼だしさ、お弁当食べよう？ 私、今朝作ってきたんですよ。鶴来さんも食べます？ たくさんあるから、三人で食べてもじゅうぶんだと思うんですけど」

私はそう言いながら、重箱（四段重ね）を「うんしょ」と机の上に置く。

ズシッとくる重さは、本物だね。

この重さは私の愛だよ。愛なのだよ。愛の結晶なのだよ。大人にはわからない愛！ なんちゃって。このお弁当はね、登校日初日、入学式、様々なイベントに華を添える、

まどかスペシャル まんぷく弁当 四段腹！

です。

お弁当箱のイラスト、お相撲さんなんだよね。えへへ。アマゾンで買ったよ。

むつかしい話はやっぱりお姉ちゃんの専売特許だから、あまり会話に入れないかもしれないけど、鶴来さんとも仲良くなりたいけどもライバルだけでも今日はお腹も空いたし……、青空の下とはいかないけど、友達とかね、みんなで食べたら美味しいんだから。

ガラガラ。

扉が開く音で、教室がトーンダウン。

「ふあい、じゃあ帰りのHR始めますよ」

え？ え？ あれ？ あれあれ？ ほお、私、落ち着いてみます。

「ええええ………！？」



## 入学式とお弁当と空き教室 4

引きずられるようにして、下駄箱のところまで来ちゃったよ。

「そんなに落ち込むなよ。まどか」

「だって……。だってさ……」

さすがに凹むよ……。

「お姉ちゃん、まさか入学式だけで今日は終わりだと思わなかったんだよお」

ちよつとだけ、腕を振って抵抗してみる。

「案内には書いてあったわね」

え、そうなの？ 穴が空くくらい読み返したのに……。

「たまきちゃんは知らなかったの？」

「いんや、知ってた」

え、知ってたの？ って当たり前だよね、お姉ちゃん、何でも知っているし。

「……どうして教えてあげなかったの」

「まどかも知っていると知ってたんだよ」

「お弁当一緒に作ってたんでしょ？」

「いやー、ウチは寝てたからなあ。家を出る時、入学式だけの割には荷物多いなあとは思ってたけどね。まどかはいつも荷物多いかなあ。はは」

うっ。みんなで食べたいなあ。お姉ちゃんもどことなく寂しそうに笑ってるし。

「たまき……ちゃんは、ちよつとだけ、アタシの知り合いにちよつと似ている……ちよつと」

「ん……冴子、なんか言ったか？」

「うっん、何でもないわ。意識すると、アイツは現れるのだから。」

……鎮まれアタシの右腕」

鶴来さんがなんか怖いです。手からエメラルド色光が……、錯覚？

でも、お弁当、学校で食べたいなあ。

「お姉ちゃん。鶴来さん。学校にこっそり残って、食べていくこと、できないかなあ」

上履きのまま、玄関先で体育座りをする私。

「わがままな妹を持つと苦労するなあ」

ごめんね、お姉ちゃん。

「せっかくだからアタシも是非というところなのだけど、んー、たしか閉門時間があつたわよね？」

鶴来さんは鞆を肩にかけ直しながら、門の方を確認する。

もうあまり生徒もいないし、やっぱりみんな帰ったのかな？

「いんや、あるにはあるが、実は今日から上級生は部活がある」

「あら、じゃあ残っても平気なのね」

「そういうこと。でもこっちの本堂は鍵がかかるから、部室棟にいないと締め出しをくらうだろうな」

私立菖蒲ヶ丘女子高等学校はね、本堂と部室棟と複合体育館と陸上トラック付きグラウンドと野球場と……ええと、あとなにがあるんだっけ？ とにかくとても広いんだよ。

「それで生徒数が少ないのね。部室棟って、旧校舎よね」

「そうそう。まあ、結構校則キビシイからなあ、ウチは。……問題はどこで食べるか」

後頭部をぼりぼりかいて、なにやら考えるお姉ちゃん。

そして、少しだけ沈黙した後、お姉ちゃんは腰に手を当て、胸を張った。

お姉ちゃんは自信満々に叫ぶ。

「お姉ちゃんパワー！！」

## 入学式とお弁当と空き教室5

「……よくこんなところ目をつけたわね。上級生でもここの扉が開いてたこと、知らないんじゃないのかしら？」

「開いてたんじゃない。開けたんだ」

「え」

「このお姉ちゃんパワーツールの一つ、針金くん一号でな」

と、お姉ちゃんは手の中の針金をもてあそぶ。

「ピッキングじゃないのよ。ていうか、いつ鍵穴を開けたのかわからなかったわ……」

鶴来さんがふわふわの髪の毛を揺らしながら、驚いている。

私だつて驚いてるよ、お姉ちゃん。

本当にお姉ちゃんはすごいなあ。

ほんと、どうやったの？ 不思議だなあ。

「ここならお弁当広げても何も問題ないだろ。むしろお弁当を広げるべき場所だ」

鼻を鳴らすお姉ちゃん、かつこいいよ！ 世界一だね！

「なぜならここは旧校舎の家庭科室。家庭科室は料理をするところ。料理をするところは食べるところ。食べるところはウチらの国土さ。相場はそう決まっている！！」

「……乱暴な三段論法ね。でもまあ……」

最後に這入ってきた鶴来さんは家庭科室の扉を閉めた。

ちよつとほこりっぱいかな、ここ。

「お姉ちゃん、でも、バレたら怒られないかな？」

と、私はついつい不安を口にしてしまった。

「確かに、まどかちゃんの言うとおり、使用禁止の可能性もあるわね。まだ火器類は使用できるみたいだし」

しゅぽつと鶴来さんはコンロの火をつけた。

鶴来さん、危ないよ？ 意外と手が早いのかな。

「誰かここで遊んでいないか見回りがくるともあるんじゃないのかしら？ あら、水も出るのね」

「ああ、鶴来さん、そんなにいじったらダメですよ」

「ちっちゃ。……まどかに冴子よ。誰も使っていないからこそ、安全なんだよ」

あらあらついつい、という鶴来さんを遮るように、お姉ちゃんは指でメトロノーム。すると、鶴来さんは、

「というのは？」

「これを見たまえ」

ニヤリと笑い、メトロノームをしていた指先で、大判の机の表面をぬぐう。

「ふむ。予想通り。ずいぶん清掃に這入っていないようだな。四ヶ月分の埃だ」

「なんでそんなことがわかるのかしら？」

「ウチが掃除しない人間だからさ。簡単な推理だよ。経験則に基づく推理だよ。灰色の脳細胞を使うこともない」

「自慢するように言ったわね」

「むむっ」

「お姉ちゃんの指先、灰色だね！」

「あいた！」

ズビシツと指でチョップされちゃったよ。

うつ。今鶴来さんに向けられたチョップが私に軌道修正された気がするんだけど、違うのかな。

「年末の大掃除が最後か……。それにこの学校に調理器具を使うような部活はない。昨年度の冬休み明けも、春休みも、だれもここを訪れちゃいないのさ。これを安全と言わずになんと言おう！！」

「あ、あんぜん……？」

頭の埃を落しながら私は聞き返す。

「……とは言えないような気もするのだけれど」

「まあまあ、そんなこと言っていないで、とりあえずお弁当広げるた

めに少しだけ掃除しようぜ。ほら、まどかは清潔なぞうきん探してくる！ 冴子はちりとりとほうきな！」

「わかったよ！ お姉ちゃん！ お腹空いたもんね！」

善は急げ、だっけ。はやくここで食べちゃえば、大丈夫だよな。

「たまき……ちゃんは？」

怪訝な顔をする鶴来さん。

「お腹を空かせて待つとする。立派だろ？」

うん！ お姉ちゃんらしくて、かわいいよ！ 私お姉ちゃんのためにお掃除がんばるね。

「……むぎぎ……」

「あれ？ 鶴来さん？ 大丈夫ですか？」

「……鎮まれ……鎮まれ……シズマレ……」

髪の毛がふわふわと逆立って、また右手が……！ ひーん、鶴来さん！

「大丈夫、ごめんなさい、なんだか昔を思い出してしまって」

しゅぼん、と鶴来さんから変なオーラが消える。

「ほう、いい思い出か？」

「なわけないじゃないのよ！」

掃除、さつさと済ませるわよ！ と鶴来さんがなにやらやる気を出したみたい。

これならすぐにお弁当を広げられそうだよ。

ありがとう、お姉ちゃん。鶴来さん。

私のわがままに付き合ってくれて。

## 入学式とお弁当と空き教室6

「これ、おいしいわ……」

「だろー？ 自慢の妹だからなあ」

へへへ。

お姉ちゃんも、鶴来さんも、二人とも私のお弁当食べて笑顔にな  
ってる。

家庭科室の片付けはすぐに終わった。

私はお掃除も好きだから、あつという間に終わらせて、ランチタ  
イムです。

今日のお弁当は、まず一番下は、おにぎりだよ。中身は、鮭、梅、  
シーチキンマヨ。

二段目はサンドウィッチ。タマゴ、ハム。

三段目はお野菜中心の和食総菜詰め合わせ。

四段目はね、えへへ。

「けれどどうして最上段にアスパラベーコン炒めがぎっしり詰まっ  
ているのかしら？」

「えへへ。お姉ちゃんの大好物だからですよ」

一番上にお姉ちゃんの好物でいっぱいにするのは、私の特技なん  
です！

「でも多すぎるんじゃない……」

「おかわり」

あ、お姉ちゃんだ。

「はい」

「オカワリッ！」

「はいっ」

「OKAWARI（めっちゃ良い声で）」

「もうひとこえっ」

「……何そのわんこスタイル……ってアタシまだ食べてないわ！」

あらら、もうアスパラベーコン炒めがなくなってしまいました。  
お姉ちゃん美味しそうに食べてくれて、嬉しいなあ。私それだけで  
お腹いっぱいだよ。

「お、冴子も食べたかったのか。まあしかしまどかの料理を振る舞  
ってもらえただけありがたいと思うんだな」

「いえ、まあ、そうなんだけど……感謝もしているのだけれど。で  
もなんでたまきちゃんがこんなに偉そうなのかしら……こほん。ま  
どかちゃん、ありがとう、同じクラスになれてよかったわ」

かわいい笑顔だなあ。

笑わないと、きりりとしたちよつと強面になるのに、笑うとこん  
なにふわふわするんだ。

私は鶴来さんの紙皿にサンドウィッチを取り分けて。

「私も入学式の時、鶴来さんが隣でよかったです。……でもなんで  
あんなに笑われたのかな？」

「まどか、冴子と友達になれてよかったじゃないか。あれは良いボ  
ケだった」

そっかよかったんだね、お姉ちゃん。それで鶴来さんと友達にな  
れたんだよね。

「まどかちゃん」

「なんですか？ 鶴来さん？」

「そう、それよ」

ビシッとひとさし指を反らしてクールにウィンク。

「へ？」

鶴来さんの表情がきりりとなった。

「友達になったんだから、敬語はちよつと違和感があるわ。同級生  
なのだし」

「変ですか？」

「変よ。だからこれからは冴子って呼んでほしいし、敬語もダメ」  
「そうだな。ウチはもう冴子のことを冴子と呼んでるからな」

おにぎりを両手に持ってお姉ちゃんはもぎもぐしながら言う。か

わいいよ！

「……たまきちゃんには敬語を使って欲しくなるのはなぜかしら」  
ちまちまとリスみたいにサンドウィッチを食べる………冴子ちゃんかわいいや。

目移りしちゃうよ。

「でもでも、そうだね、つる……冴子ちゃん、がんばるよ！ ぶい！」

冴子ちゃんはとても素敵な人。

友達になれてよかったな。

「ね？ お姉ちゃん。あ、ご飯粒ついているよ」

「お……お、おう」

私はひょいっとご飯粒をお姉ちゃんの口元から拾い上げる。

お………おろ？

「どうした？ まどか」

おおおおお、お姉ちゃんの口元に付いていた………あああああ。  
たたたた食べていいかな？ いいよね？

こ、これはあれだよ、食べ物粗末にしたらいけませんっていうアレだよ。

べべべ別におおおおお姉ちゃんの口元に………！  
「なんか汗かいているじゃないか。熱でもあるんじゃないのか？」

ピュ。

お、おお、おでことおでこでガールミーツガール………！！

ノンノン！ これが噂のシスターミーツシスター！！

「ついでにウチのおにぎり返して貰うぞ」

「指す、すす、す」



吸われたああああ！

私は顔から火が出そうになって、がばつと体を反らす。

「あら、市販の風邪薬なら持ち歩いていけるけれど、使う？」

さ、冴子ちゃん……や、やさしいいいい！

「ななななんでもないです大丈夫ですう！　マイラブイズフォー  
エバー」

「……本当に大丈夫なの？　まどかちゃん時々様子が変よ？　朝から風邪気味だったんじゃない？」

わわわ私がお姉ちゃんのこと好きなのばれちゃう！

冴子ちゃんって勘が鋭いの？

「ああ、まどかのやつ、いつもこんな感じだぞ？」

「そそそそそうだよ、冴子ちゃん、まどかのやつ、こっ、これが正常だぞ！」

「……そ、そうなの」

なんとかごまかせたよ。ふう。

「しかしこうやって並んでいるところを見ると本当にそっくりね。性格はまるで違うから表情が違って見分け付けけど、黙っていられたらわからないわ」

「まあ双子だからな」

お姉ちゃんが私から離れて、再びおにぎりに手を伸ばす。ちょっと残念。もう少しだけ……。

「美人な方がお姉ちゃんだよ？」

「外見は同じに見えるわよ」

「そうかなあ」

すると、お姉ちゃんがもぐもぐしながら。

「まあ、一つだけ違うのはほくろの位置だな」

うん。そうそう、私は唇の右下。お姉ちゃんは唇の左下にほくろがあるんだよね。

「あら、よくよく見れば」

「ちなみにウチの誕生日は6月11日午後11時50分。チエジウと一緒だ」

「あ、私は6月12日午前0時10分。松井秀喜と一緒にだよ！」

「え、ああ、うん。そうなのね」

あれ、鉄板のネタが……。

と、そのとき、家庭科室の扉がガラガラと開いたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8627z/>

---

梅園さん家のたまきとまどか

2011年12月30日22時51分発行